2013年(平成25年) 1月23日 水曜日
琉球新報

林業と自然保護 共生在り方探る

那覇で「やんばる」シンポ

「やんばるの森の利用を考えるシンポジウム～保全と利用の両立を目指して～」(県森林緑地課主催)が20日、那覇市のほしぞら公民館ホールで開かれ、市民ら約130人が参加した。学識経験者や行政担当者らが登壇し、それぞれの立場で林業による森の利用や自然保護の在り方などを議論した。

専門家が活発な意見を交わした「やんばるの森の利用を考えるシンポジウム」＝20日、那覇市のさいおんスクエア内ほしぞら公民館ホール

討論では日本エコツーリズム協会理事の比嘉梨香さんが国頭、大宜味、東3村の中高生たちが山学校体験をする「やんばる次世代プロジェクト」に取り組んだ成果を発表した。地元の人が主体となる意義を強調し「人は知ったものしか愛さない。すべては知ることから始まる」と主張し、自然と親しむことの重要性を説いた。

沖縄生物学会の当山昌直副会長は「奇跡的に残ったやんばるの生物、自然を賢明な利用で未来につなげよう」と訴えた。

世界自然遺産登録について自然保護対策の重要性を説明した環境省那覇自然環境事務所の植田明浩所長は「いろんな立場の人が参加するやんばるの森林を考える検討会の場は画期的だ」と県の取り組みを評価。

国頭村の宮城久和村長は若年層も林業に従事し、木材が村に欠かせない状況を説明し「自然だけを守ればいいという考え方は受け入れられない。自然との共生を感じながら、進める環境保全型産業構造の構築がまさに望まれる」と強調した。

質疑応答では「山の深い所の荒廃の現実は、県の説明と乖離(かい)しすぎている。開発ありきの計画を急ぐべきではない」との意見が出た。森林緑地課の謝名堂聡課長は「保全と利用、ゾーニングが大切だ。今の案をベースに、よりよいものにしていくと理解してほしい」と訴えた。琉球大の芝正己教授は「保全は何も動かないことではない。自然も動いているのでポジティブに考えることも大事だ」と話した。